

和光大学での教育 ——「学校インターンシップ」についての覚え書き

山下暁子 YAMASHITA Kyouko

- 1 — はじめに
- 2 — 本学における学校インターンシップの位置づけ
- 3 — 学校インターンシップの活動
- 4 — おわりに

【要旨】本稿は、2016年11月26日「和光大学で育ち合う小学校教員のタマゴたち」と題して行われた公开发表・シンポジウムで、筆者が担当した「学校インターンシップの指導について」と題して発表した内容を元に、新たに内容を追加し書き直したものである。

コロナ禍以降、授業担当者の交代などもあり、2022年度からは授業や実習が徐々に回復してきているが、現在の「学校インターンシップ」は授業構成や内容が大きく様変わりした。

退職を機に、担当者の一人として「学校インターンシップ」開始当初からこれまでの経験と反省の一部を、覚え書きとして簡単に記しておきたい。

1 — はじめに

和光大学での教育活動を振り返ると、一番思い出深いのは「学校インターンシップ」である。また、授業時間外に一番時間を割いた授業でもある。

2015年度より当初2年間は行田先生が主担当となって山本先生と私と3名で担当し、その後富樫先生、辻先生、池野先生が加わり、2019年度入学生までは1年生を対象として授業を行っていた。現行の授業体制は実施学年をはじめ内容や授業構成が大幅に変わっていることもあり、これまでの学校インターンシップについて、ここに覚え書きしておきたい。

学校インターンシップについて、和光大学での開始当初と同時期に発行された報告¹⁾では、教育実習で教員志望をあきらめてしまうという課題に対して、子どもとふれあう抵抗感をなくす機会や、教育実習にスムーズに入れるようにという目的、子どもとふれあうことによる教職への意欲の高まりを期待して「学校サポート活動」(週1回3時間程度)を設け調査している。その他の大学の学校インターンシップの報告事例を見ても同様に、多くは

和光大学での「学校支援ボランティア」(中田先生が担当)にあたる内容を「学校インターンシップ」として実施していることがわかる。このような内容と主旨は、和光大学の場合「学校支援ボランティア」と呼んでいる活動にあたり、「学校インターンシップ」とはまた別の活動になる。

和光大学では「学校インターンシップ」を1年次に設定し、「学校支援ボランティア」を2・3年次に実施するように推奨していた。学校インターンシップでは「和光の教育を学ぶ」という特色を掲げている。具体的に学校支援ボランティアとどのように違うのか下記の表1に示す。

2 ―― 本学における学校インターンシップの位置づけ

開始当時の頃は「学校インターンシップ」の必修化が議論されている状況もあったように教職における重要な位置づけの授業であるという意識はあったが、実際に数年授業を重ねていくことで学生への影響を実感したとともに、「学校インターンシップ」の授業と関連して「学校支援ボランティア」の活動の意義が大きいことも感じていた。

「学校インターンシップ」での学習に加え、さらに部分的な参与学習が実施できると、学生が早期に各自の適性を自覚し、その後の大学の教職授業の履修において自身の位置づけをイメージしやすくなる。部分的な参与学習については「学校支援ボランティア」で公立小学校の授業を見学する機会や、授業のサポートに入ることで体験できるよう期待したいところだが、各小学校によって学生に指示される業務内容は様々であることから、子どもとふれあう体験は行っているが小学校の授業に関わる内容はすべての学生が十分に体験できているとは限らないようだ²⁾。

和光大学での学校インターンシップの学びのねらいは、下記のとおりである。

①職業体験＝教師の仕事を見る・知る

表1 学校インターンシップと学校支援ボランティアの違い

	学校インターンシップ	学校支援ボランティア
内容と主旨	和光学園の理念と教育について学習する。大学授業(講義と実習)と小学校行事等への参加による実習。小学校教師の仕事について具体的なイメージを持ち、ここから教職の勉強をスタートする。基本的に1年次に履修。	主に子どもと接することと小学校教師の仕事を知る体験。受け入れ先の小学校で指示を受けた業務を行う。内容は学校によって様々。2年次より実施。
依頼方法、大学のサポート体制	大学として授業担当教員が学生の受入れを依頼する。活動にあたっては授業内で事前指導を行う。	学生が希望する小学校や自治体ごとの申し込み方法。受け入れ先小学校の指示に従う。
受け入れ	和光学園の小学校(和光小学校、和光鶴川小学校)	主に教育実習を行う予定の自治体にある公立小学校
単位認定の状況	正課活動として単位認定	正課外活動(単位認定なし)

※内容は当時、現行の内容とは違う

◆授業の実践

◆授業や行事で見られる、教師の働き、児童との関係

②教育の内容＝どういう教育か、児童は何を学んでいるのか

◆児童の学習

◆学習の成果とそのゆくえ

◆方針・カリキュラム計画……継続と更新

この2つはそれぞれ別々ではなく、一体となって学校を動かして行く原動力となっているものであることを留意して実施していた。

①の教師の仕事に関しては、教室の机の配置、掲示物や展示物といった形式的なものから、授業内での教師と児童のやりとりの言葉、授業の方法などがある。これは、授業公開や公開授業研究会などで主に学習できるようになっていた。②のどういう教育なのか、児童は何を学んでいるのかということは、上の教師の仕事と一体となって教育として働くものである。児童の学習はどうか、学習の成果は？ その成果のゆくえはどうなっていくのか、教師の仕事と合わせて各実習参加の中で考察して行ってほしいと考えていた。

②の項目の3つめの方針・カリキュラム計画については、当時の学校インターンシップの授業の中ではまだ十分に伝えきれていない部分であるという認識があった。実際に学生もそのような点が見えづらく感じていたようで、公開研究会で学生が小学校の先生に質問をしたこともあった。

例えば総合学習では、先に細かく年間の授業計画を立てて行っているわけではなく、大きなテーマをもとにそれぞれの年度ごと教師ごとに進めており、子どもの探究の進行とともに詳細な内容が決まっていき、子どもと共に授業を進めながら結果として見えてくる学習がある。これを大学の授業として講義の中で一通りは伝えることはできるかもしれないが、実際の授業で子どもの考えや興味の方向に沿ってどのように教師が学習（体験）を準備しているのかということは、教師の思考の変遷や迷い、子どもの発想の受けとめ方なども含め、なかなか学生へ伝わりづらいことである。公開研究会では授業づくりの過程や教師の考えを授業見学と研究発表とを合わせて見ることで、学生たちは知ることができる。

公開研究会での校長講和や講演などへの参加について

和光学園の教員の間では「和光学園実践史研究会」がもたれており、歴史的な掘り起しの研究がされている。現在の教育の基礎に和光学園の小学校には長い歴史的な積み重ねの歴史を知ることが大切であるが、一方で、大学生たちには、現在の和光学園の教育について、実習の経験と合わせて公開授業研究会での校長講話などの内容から、現在につながる教育の背景や長年の積み重ねがあることを知ってほしいと考えていた。現在どういう方針で教育を行っているか計画しているか、私立の学校であり、長い歴史の上で、これからどう教育を継続し、どのように新しくしていくのかということも知って考える機会として、1

年間を通して小学校の活動を見てきた実習の経験と合わせて、年間の授業の中で最後の実習である公開授業研究会への参加に大きな意味が出てくる。

以上書いたことはインターンシップでの学習の表の側面である。裏の側面は何かというと「話を聞く」ことができるようになることである。大学生なら日ごろ大学での授業を受けているので体育館で校長先生の話聞くくらいはできることだと思われるだろう。1期生のときには教員は何も気にせずに大学生を小学校での実習へ連れて行ったのだが、体育館で椅子に座っているだけでもやっとのことで、大学生は長い話を聞くことができないということがわかった。大学の授業では途中で飲み物を飲んだりトイレに行ったり自由にできる。机にもたれ、そのまま寝ていることも多く、そうでなくてもスマホを見ていたり内職をしていたりすることもある。「大学生が授業を受ける」態度とは授業を集中して聞くというのが建前だが、授業に支障が無い限り、授業に集中して話を聞いているかどうかは学生の自主性に任されている。これは特に和光大学の学生に限ったことではない。

学校インターンシップでの学生の参加態度は小学校の先生方からもたびたび注意を受けた。「大学生」なのに、「大学生」なのだから、という言葉をいただいたが、先生方はじめ一般的にイメージされる「大学生」になるまでには、きっと4年間かかるのかもしれないという実感であった。小学校の先生方は日ごろ一緒にいる「小学生」に対して「大学生」、しかも「教師になる」という見方をされている。先ほどまで「高校生」だった人たちを「大学生」に育てていかななくてはならないのだという認識に改めて、学校インターンシップの授業を行うこととなった。

これまでA（前期）・B（後期）で行っていたときには、1年生での履修であること、授業参観→運動会→林間→秋祭り→沖縄→公開研（和光小・鶴小）という構成で、一つ一つの実習が「授業・実習・授業・レポート」となっており。実習と合わせて事前指導と事後指導で和光の教育のねらいがわかるようにしていた。

大学の先生が大学の授業で話をするというのは、学生にとって他の授業と同じ扱いで聞かれてしまうという問題があり、両小学校の先生に来ていただいてお話をさせていただくようにもしていた。第4期生までは、授業参観や運動会などで子どもの様子を見てから林間に行って、秋祭りでは林間で仲良くなった子どもたちに会いに行くのが学生たちの楽しみになっていた。そうすると、公開研で子どもたちの学習や先生方の取り組みに興味を持って理解できるようになる。子どもたちの顔が見えている、ということは学生にとって大切なことである。

体育館で講話を聞く

普段大学で授業を聞く際には机と椅子がある。机の上で資料を見たりメモをとったりしながら話を聞くことができるが、小学校の体育館はパイプ椅子を並べたところで資料を見ながら話を聞くのは慣れなくて難しい。飽きてきてスマホを見たり居眠りしたりする。パイプ椅子は座り心地が悪く、長い間座っていることは難しい。冬の体育館は冷え込みが厳しく慣れないスーツの足元は余計に冷える。

こういうことの注意をあらかじめ学生へ伝えて準備しておく必要があったが、始めは気づかなかった。

3——学校インターンシップの活動

和光らしさの議論

当初の学校インターンシップの授業は基本的に1年次に全員履修することを推奨していた。前期（学校インターンシップA）と後期（学校インターンシップB）とに分かれており、毎週土曜日に授業を行い、和光両小学校の行事がある際には土曜および日曜に実習を行っていた（年間のスケジュールは図1参照）。

第1期生の最初の実習は休日授業公開の見学実習であった。子どもたちの学校での様子を見て様々なことに気づいた中で、学生たちが一番気になったのは子どもたちが先生をあだ名で呼んでいること、敬語を使っていない（先生に対して友達のように話していた）ことであった。その後の見学でも和光の小学生の先生に対する態度が気になるということについて、和光大学での自分たちの授業態度にまで及んでたびたび意見が分かれて議論になった。和光高校やその他自由な校風の高校の出身者は（自分たちも先生に対してそういう態度でこれまでやってきたので）、「小学生が先生を先生扱いしていないように見える」ことについて特に違和感はないし異論はないという意見であった。一方で和光高校出身者の者も含め「先生（大人）に対して礼儀を持って接するように教えるべき」という意見の学生とに分かれた。「和光だから」自由に振舞って、先生に対しても言いたいことを自由に言うというのは違うだろう、ということから、大学の授業においても強調される「和光らしさ」への疑問が出てきた。同じ時期の私の別の授業中にも、他学科の上級生から「和光生らしいね」

図1 学校インターンシップ年間活動スケジュール例（2017年度）

2016年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
授業期間	→				夏期 休暇	→						授業終了
★ 小学校行事 との連携	運動会	★	★	★			まつり	★	★	★	★	公開研究会(鶴)
			授業公開	林間合宿			沖縄学習旅行					
◇ 授業内 実習	登山実習	◇	◇	火おこし実習			登戸研究所見学	◇			研究報告会	
履修者 (カッコ内は人数)	A:前期				B:後期				初等1年(34) 初等2年(4) 心理1年(2) 心理2年(1)			

と言われたのが気に入らず、「和光らしいとは何だ」と憤慨して授業から出て行ってしまったことがあった。この件についての学生たちの意見の対立がたびたび学校インターンシップ授業に対するひっかかりとなっていたこともあり、前期の授業後半で討議する機会を設けた。ホワイトボードに書き出しながら討議をしたことで、自分たちの意見が整理され、意見は分かれたままだったが、ひとまずこの件に関しては落ち着くこととなった。

この後の学年でも同様に小学生の態度について気づいていた学生はいたが、年々この点に疑問を持つ学生が少なくなってきたように感じている。大学生が小学校の授業見学で見学すべきポイントではないと考えて考察から除外しているのか、それとも、小学校の雰囲気が変わってきたのだろうか。

学生の感想 2015年6月20日配布資料（行田先生作成）より抜萃

先生との距離が短い。公立の小学校だと先生に敬語を使うのが当たり前であり、礼儀のない子とまで思われる。しかし、和光鶴川小学校は違い授業中も廊下ですれ違った時もタメ語で会話しているのだ。恐らく、タメ語で会話する事によりメリットとデメリットがうまれるのではないかと。

メリット：子供と先生の距離が大いに縮められる。先生と子供の距離が縮まる事により、信頼が生まれ悩みなどを打ち明けられる仲になれる事は良い。

デメリット：目上の人に対しての会話がタメ語で慣れてしまうから、小学校中学校高校大学と全て和光大学で統一するならば話は別だが、タメ語で慣れてきたがために敬語に慣れる事が難しくなる。

和光の中では通用していた事も、他校や一般社会に通用するわけでは無いので、社会には通用しないが和光だけと割り切ってタメ語を使う必要がある。（片岡・和光小）

私の小学校では苗字を呼ぶことが当たり前だったが、児童達の名前を苗字ではなく名前と呼んでいるところも、児童と教師の距離が近く感じて好ましく思えた。

今回の授業ではカマキリについての話だったが、カブトムシの幼虫についての話を聞いたかっらしい児童をしっかりとさめている様子があり、勉強になった。しかし、所々で少し悪い言葉を使ってしまう児童もいたようだが、そのところも保護者の前であろうとしっかりと注意を促して叱る事の出来る所には尊敬の念をいただいた。

児童と教師の距離が近いのは良い事だが、近すぎると、教師と教えてもらう側と言う認識が薄くなってしまうのかもしれない。適切な距離感こそが教師と児童自身のためだと私は思った。（塩田・鶴小）

児童が先生の出した問題を班で話し合いをしてそれをもとに進行していく授業だったため、全員と向かい合い、自由に移動することができていたので、みんなが積極的に発言しているように感じた。この授業を見ていて先生と児童の距離がとても近いと思った。ため口で先生に質問している児童もいた。僕は授業中に机に座ったり、席を立ち歩き回ったりしていた児童に先生が注意をしなかったことに疑問を持った。その先生には質問ができなかったが、注意すべきことなのではないかと思った。

1年生のクラスでもトンボの真似をするというときに雑巾がけをしたりブリッジみたいなことをして走り回ったりしている児童がいた。その様子を見て少し自由すぎないかと感じた。先生も4年生のクラスと同様に注意をあまりしていなかった。児童たちの将来が心配になってしまうほど、これでいいのだろうか。と強く思った。授業の後に先生にあんなに自由で疲れないのですか？楽しいですか？と聞いてみた。その先生はみんないろいろ個性があってとても楽しいです。と答えてくれた。果してこれでいいのだろうか。個性を尊重して自由な授業は良いと思うが、授業に集中していない児童にはきちんと注意をすべきなのではないか。と考えさせられた。（畑中・鶴小）

学生たちの参加

この2つの写真は、2016年度の和光小学校のいちようまつりに参加した学生の様子である。

当日の午前中は大雨だった。そのため、少し時間を早め、グラウンドではなく、教室内でお店を行った。午後の踊りの広場については、昼休みを延長したまま、校長先生は午後の開始時刻を発表せずにいた。どうしてぎりぎりまで判断を待っていたのか？踊りの広場をグラウンドで行いたいと、インターネットで雨雲の様子を見ながら待っていたのだ。終了予定時間のことを考え、途中で晴れたとしても体育館で行うという判断がふつうではないだろうか。しかし雨雲は去って、結果的に、体育館ではなくグラウンドで行うことができた。グラウンドの整備は保護者が学校と協力して、もちろんここに大学生も加わって、あっという間に使える状態になった。今回は、大雨という天候の問題だったが、問題やトラブルに対処する際の教師や学校の動きや、判断に伴う先生方の思いというのを感じられる経験であった。先生も保護者も一体となって児童のために力を出すという、和光小の動きのよさというのも今回の実習で見て欲しいところの一つであった。

学生たちには動きやすい服装で来るように言ってあったが、はだしで泥水に浸かってグラウンドの水を取り去る作業を行うことになるとは思っていなかっただろう。2016年度以降、運動会やまつりでは、大学生がテントの片付けや作業を行うようになった。

林間合宿の支援員

学校インターンシップ A (前期) のメインの実習は林間合宿である。6月下旬から7月にかけて二つの小学校の学年ごとに(1~6学年それぞれ分かれて)支援員として小学校教員の指導を受けながら、合宿で児童の支援を行う。かなりの重労働となるが、大学生特有の甘い気分が吹き飛び、教師の仕事の現実を知る機会となっている。厳しい経験をした学生ほど、次年度も支援員を希望する。肢体不自由児を背負って登山をした学生もいた。また、聴覚障がいのある大学生も林間合宿の支援員として通常学級に入って活動するなど、相互にインクルーシブ教育を大切に、小学校側にも協力していただいて事前事後指導などについても、これまで試行錯誤してきた。

厳しい体験に耐え積極的になる学生がいる一方で、この実習での経験から教職に尻込みして消極的になる学生もいる。2年次になって現場への恐れや感情が現れてくる学生もい



グラウンドの水をぞうきんやスポンジで吸ってバケツへ絞る。



上から子どもたちが大学生に声をかけている。

る。それぞれの学生の経験を大切に受け止めて支えとなるよう、その後の学校ボランティア、教育実習へとつなげていける指導を、初年次教育を含め学生との関わりの中で行っていきたいと考えていた。

第1期生の初めてのときには、ただグループを分けて合宿へ送り出した。大学での事前の指導は講義の授業のみで、主に林間合宿の内容の説明であった。単にキャンプへ“そのままの大学生”を送り出したため、街中へお出かけする服装でヒールのあるおしゃれな靴を履いて行って、山登り中にヒールが壊れたということもあった。ほとんどの学生は登山の難度にかかわらず、自分の面倒をみることで精一杯で小学生の支援をすることができる者は少なかった。

4日間子どもの中で過ごすこととキャンプ生活の実習は、学生の成長にとってはかなりの影響があった。ただ、大学生の日常から何の準備もなく急に小学生と一緒に生活、キャンプ生活の環境に放り込まれることは学生にとって多くのストレスがあり、余裕のない実習となった。

初回の第1期生の実習を終えて、登山の装備や服装についての知識、体力の準備、心の準備が必要だということがわかったため、翌年から大学内での事前指導を、時間をかけて行うこととなった。まず、高尾山登山を4月下旬に行い、装備や服装を確認し、山歩きのルールやどの程度の体力が必要かを実感する機会を設けた。高尾山登山は入学してすぐの時期で、まだ人間関係が手探りの状況の頃に初等の学年内で仲良くなるきっかけとなる行事となった。

その後、学内での火おこしの実習を行う。火おこしは主に高学年に配属される際に必要となる。マッチの擦り方から始めて、火を大きく燃やす、調整する、ということを行って、昼休みにかけて自分たちでおこした火でバーベキューを行った。

その他に、小学校でのテント張りの実習や調理実習、前日集会への参加、小学校の先生に大学授業へ来ていただいて話を聞く機会を設けるなど、林間合宿への参加の事前指導が充実していった。

事前指導によって学生は支援員としての仕事の準備をして実習に臨むことができるようになったのだが、他にも次々とたくさん問題が出てきた。最初の第1期生の林間合宿の実習で、持病で倒れた学生を現地まで行田先生が迎えに行くということがあった。これを機に、健康状態や持病についての把握を行うこと、また、次の年度ではアレルギーがあって林間合宿中に十分に食事がとれなかったという声があり、宿泊を伴う実習参加にあたって、アレルギーについての事前調査も行うようになった。他にも、健康上の問題としては、山に入って期間中お風呂に入れなかったことやトイレの環境がよくないといったことの心配の声があり、女子学生の生理期間を考慮しての直前の日程調整などに苦労したこともあった。

先輩学生の働き

毎年数名～10名程度だが、上級生の学生が高尾山登山や火おこしに自主的に参加して手伝うとともに、1年生と親しくなることを楽しみにしていた。その他の実習にも同様に自主的に参加して上級生が実習の手伝いをしてくれて教員としてはとても助かった。上級生の態度を見て1年生が倣うこともあり、第4期生のころまでは先輩学生が来て後輩との関係がつくられていく良いサイクルが出来ていた。

林間合宿や沖縄学習旅行の実習には2年生以上の学生も参加可だったため、学校インターンシップを中心に先輩後輩の関係をつくって、公開研のころには実習中に上級生に1年生の見学態度の“しつけ”をだいぶ手伝ってもらっていた。上級生にとっても、1年生の実態が見えて自分を振り返るよい機会だった。公開研では上級生が1年生の前で「積極的に質問や発言をしよう」ということも見られた。

大学での学校インターンシップの授業で「林間の話をしてくれる？」と言えば喜んで何人も学生が来て話をしてくれた。上級生が話をする機会として林間の他にも授業内で来てもらうこともあった。上級生になってから「1年生の前で話をする」「多くの人前で経験を伝える」という意味を自分でわかって話す、ということも学校インターンシップの中での大切な教育効果であった。

沖縄学習旅行

学校インターンシップB(後期)授業のメインの実習は沖縄学習旅行である。和光学園の二つの小学校に分かれて同行し、沖縄学習旅行の見学実習をする。大学生は大学生として同時に沖縄学習をしていく。

児童は何を学んでいるのか、というのを一緒に体験させてもらうことと、自分たちの経験はどういう教育だろうか、つまり学習の成果とそのゆくえ、自分たちは何を考えたらよいのかということもこの実習のねらいとしていた。

第1期生のとき、私が引率したグループは、バスをチャーターせずには県庁前から出る市民団体のチャーターしている乗り合いバスに乗って、辺野古基地の座り込みテントの現場へ行き、一日中座り込みの方たちと共にテントに居ることになった。学生たちは歓迎され、そこにいる様々な人たちの話を聞いたり、マイクを持たされて一人一人発言を求められたり、といったことをして一日を過ごした。工事の入り口ゲートへのデモ行進も行って機動隊の前を歩いたりもした。気温が高く、食べ物や飲み物を手に入れる場所やトイレが近くに無いなど、一日過ごすには厳しい環境であった。

市民団体のバスに乗ってきたため、帰りも同じように反対運動の方たちと共に夕方一緒にバスに乗って県庁前まで戻った。バスの中でも学生たちは発言を求められてマイクを渡されたり、反対運動の替え歌を一緒に歌うようにと歌詞を渡されたりしながら、60～70年代の歌と雰囲気がいっぱいのバスで帰った。

この時のことは、体力的にも精神的にも辛かったと学生たちに後々まで恨み言を言われ

ることとなった。基地建設反対運動に無理やり参加させられたことは、沖縄の基地問題に対して考えるきっかけとなったが、(反対運動は)「このやり方でいいのかどうか」という意見が多くあった。羽田に着いて帰路の京急線の中で学生に囲まれて、苦情を言われ、教員としてこのような(学校インターンシップでの一連の)教育を大学生に行っていることについてどう考えているのだと問いただされたことは強く記憶に残っている。

単純に反対運動をやっている人たちへの疑問、やり方への嫌悪の声もあった。例えば「なぜ替え歌を歌うのか」「なぜみんなで合唱したがるのか」ということは多くの学生が疑問に思ったことであり、また、嫌だと感じたことだった。反対運動に付き物の文化だと捉えていたのだが、そのような反対運動の文化的(?)背景にある60~70年代の運動や当時のフォークソングブームについても、学生たちは知らなければ理解できないことだろう。

また、沖縄への関心をもっと深めてから沖縄学習旅行へ臨むよう、2期生より夏季休暇中に沖縄についての二つの課題(文化と沖縄戦)や課題図書を読書を課すようになった。

他にも第2期生のときには、辺野古の状況を海上から見学するために漁船に乗って海へ出たところ、警備艇に警告を受けて追いかけられ、びしょ濡れになって戻ってきたということもあった。現在は建設が進んでおり、漁港からの見学も海上からの見学もできない状態になっている。

沖縄の平和学習、基地問題についての学習は、直接に戦争反対、基地問題=反対運動として捉えるという、単純なことではない。学校インターンシップとしてこの実習を行っている意味は、他の学校インターンシップ全体の実習もそうだが、一つは、自分たちの「興味・関心」のあることを学ぶということではなく、「課題・問題」を見つけることを学ぶということにある。これは、和光学園の小学校の教育実践にも共通していると考えている。

興味・関心とは、ただ単に、それだけでは、ごく個人的なものである。課題・問題は「興味・関心」を向けた「もの・こと」が、他者と共有化できるレベルにまで練り上げられ、そのうえで生じてくる疑問形の命題である。他者と学び合い、やり取りするプロセスで、個人的な「興味・関心」が、みんなに共通する「課題・問題」にまで練り上げられ、具体的な輪郭をもってくる。

もう一つ、「課題・問題」の意識が生じて来るとき、それは自分の住む世界が「他者」の介入によって安定を大きく揺るがされるときである。もちろん、他者と学び合う事も意識を揺るがされると、そう言えるが、もっと暴力的に物理的にそれがやってくることもある。それが、戦争が起きている状況や、基地が造られたところ、造られつつあるところに住む人たちの状況などである。そこでは、生半可な「興味・関心」は通用しない。それだけに無力感や無関心を生むこともあるとも言える。沖縄の基地問題は一例である。

沖縄学習旅行では、第2期生から、山本先生の計らいにより沖縄国際大学の学生と交流の機会を設けていただくことができるようになったことで、このようなねらいが実習として少し具体化できたのではないと思う。現地の同年代の大学生と沖縄学習旅行前と現地で様々な話題で会話することによって、第1期生のときのような「偏向している」教育だ

という思いで終わるのではなく、沖縄学習旅行で「課題・問題」を見つけて自分たちが何を学んでいるのかを理解することが少しはできたのではないだろうか。

4 おわりに

教育の現場で考えてみれば、特に学齢期の児童生徒を相手にする教師の仕事は、日々変化の激しい生身の人間の生と毎日向き合っていくことになる。そこでは自分の「興味・関心」のみで動くことはできない。さまざまな文脈の中で、さまざまな人間関係や葛藤のプロセスで「課題・問題」を自ら構成し、日々の小さなことから世界の状況を見る大きなことまで、それらに取り組んでいくことが出来なくてはならない。

また、人間の生の弱さ強さ、はかなさや貴重さについて、戦争体験者の人たちから直接話を聞くことは、これからもしも、教育という人間の生にかかわっていく立場となった際に、仕事としての教育、対象としての児童という捉え方ではなく、ひとりひとりの生とかかわっている時間として実感していけるような経験となればよいと考えている。繊細な人間の生の体験を語ってもらえる機会は少なく、残された時間も短くなってきている。もちろん、今も過酷な状況に置かれた人々は様々に多数いるが、社会的状況が個別化し細分化した中での問題で、実際その只中にある人から語りを受け取り寄り添って実感できるという機会はなかなかないだろう。

何が望ましいのかへの体系的な探求は、教育の研究者や教育実践家にとって仕事であるだけでなく、教育の場合には、社会全体にまで及ぶ。

民主的な社会とは厳密に言えば、教育の目的が所与のものである社会ではなく、教育の目的が議論や熟議を要する絶え間ない問題としてある社会なのだ。³⁾

他の大学で行われている学校インターンシップでは、教育実習や教職への初期段階での困難に対処する目的で、例えば「子どもとふれあう抵抗をなくす機会」や「教育実習にスムーズに入れるように」というように、直接的な就業準備を期待してインターンシップが行われている。先に見てきたように、和光大学では「学校インターンシップ」とは別に「学校支援ボランティア」として行ってきた内容である。では、これまで行ってきた和光大学の「学校インターンシップ」とはどのようなものだったのか、ということの本稿では振り返ってきた。

他の大学で行われている学校インターンシップの目的にもある「自身の適性を見極める」という働きは、特に第1・2期生の実習では顕著であったと感じている。その方法として和光学園内の小学校の教育を見学するというのは少し厳しかったかもしれない。実習で先生方の働きやその熱量を見て感じて、「自分には無理かもしれない」という感想を持つ学生は少なくなかった。一方で、公立の小学校にボランティアへ入った際の「自分には無理かも

しれない」という学生の声は、職場環境、労働環境の厳しさに起因するものが多い。そのような違いから見ても、「学校インターンシップ」で行ってきたことは（様々に批判を受けながらも）教員たちが様々な試行錯誤を繰り返し、和光の特色を出しながらその本来の働きを果たすことができたのではないかと考えている。

《注》

- 1) 愛知教育大学 教職キャリアセンター・体験学習支援部門「平成 28 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業 新たな教育課題に対するための科目を教職課程に位置づけるための調査研究 学校インターンシップの実施による実践的指導力の向上を目指す調査研究実績報告書」。

〈https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/03/1395666_01.pdf〉
2022/01/15 閲覧

- 2) 同様の課題は文部科学省の有識者会議でも挙げられている。

「【実際の課題の体験不足】有識者会議アンケートによると、学校インターンシップを実施している大学は、2年次に実施している大学、4年次に実施している大学がそれぞれ32大学（72.7%）、3年次に実施している大学が25大学（56.8%）、1年次に実施している大学が20大学（45.5%）であった。また、学校インターンシップを正課（必修）で実施している大学は、1年次に実施している大学が11大学（25%）、2年次に実施している大学が9大学（20.5%）、3年次に実施している大学、4年次に実施している大学がそれぞれ1大学（2.3%）であったことから、国立教員養成大学・学部を中心に、教職課程の学生に、学校現場において教育活動や校務、部活動などに関する支援や補助業務など、学校における諸活動を体験させるための学校インターンシップや学校ボランティアなどの取組が定着しつつあるが、学校の教員が実際に直面する様々な教育課題やその解決過程にまで触れる機会は未だ十分ではない」。

文部科学省、2017、「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議（第9回）資料1 議論のまとめ案、H29.7.12」pp.5-6。

〈https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/077/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2017/07/18/1388260_001_1.pdf〉 2022/01/15 閲覧

- 3) Gert J. J. Biesta, 藤井啓之・玉木博章訳『よい教育とは何か』白澤社/現代書館、2016。